

まえがき

東京音楽学校創立百周年記念事業の一環として『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第一巻』が刊行されてから三年が経過し、このたび『演奏会篇第一巻』が刊行の運びとなった。東京音楽学校が演奏会の本拠地とした奏楽堂の創建からちよろど百年目を迎えた年に、『演奏会篇』が出版されることは大変な幸いであり、感に堪えない。奏楽堂は昭和六十二年三月、上野公園内に移築され、現在、東京都台東区の管理下にある。

百年前の明治二十三年春、奏楽堂付設の新築校舎が現在地に落成し、五月十二日午後二時から開校祝賀演奏会が行われた。『東京日日新聞』（明治二十三年五月七日および十三日付）にはその曲目と式次第が次のように記されている。

- 第一 歐洲管絃樂、大祭曲大序（式部職樂隊、ラヒネル氏作曲）
- 第二 洋琴聯彈、新家屋祝賀曲（同校教員 ビートーベン氏作曲）
- 第三 新校授受式
- 第四 榎本文部大臣祝詞
- 第五 伊澤同校長答辭
- 第六 新校開業式祝賀合唱、歌ノ徳（同校教員生徒一同）
- 第七 本邦箏曲、都の春（山勢氏外數名）
- 第八 絃樂合奏、清夜曲（同校生徒）
- 第九 歐洲管絃樂、メサイア曲ハレルーヤ（式部職樂隊）

奏楽堂における最初の演奏会となったこの日の来賓は、三條公爵同夫人他各国公使内外貴紳夫人令嬢ら五百余名にのぼっ

たと伝えられる。以来奏楽堂で催される東京音楽学校の演奏会は、当時のわが国最高水準の演奏会として迎えられ、固定したファンも多く、回を重ねるごとに大きく成長していくこととなった。今回の『演奏会篇第一巻』はその成長過程を詳細に物語るものである。

『東京芸術大学百年史』の音楽篇全体の構成は、現段階の編集方針では『東京音楽学校篇第一巻』（既刊）、『同第二巻』『東京芸術大学音楽学部篇』『演奏会篇第一巻』『同第二巻』の五分冊となる予定である。演奏会篇は『音楽学校篇第一巻』刊行の際、懸案となっていた演奏会に関する資料を集中的に扱ったものである。

『演奏会篇第一巻』は、明治二十一年から大正十五年までに行われた演奏会のプログラムの他、当時の解説や新聞・雑誌の批評や関連記事により編年体で構成されている。これらは、明治・大正時代の楽界を明らかにするものとしてきわめて重要であるという観点から可能な限り調査し収録した。ここで取り上げる演奏会は、東京音楽学校が主催した卒業演奏会、定期演奏会、特別演奏会、地方から招かれて行われた出張演奏会、原資料の現存するかぎりの学友会および同声会の演奏会、それに大正時代の邦楽会の演奏会である。但し、邦楽調査掛の成果を問う邦楽演奏会は今回扱わず、『東京音楽学校篇第二巻』の「邦楽調査掛」の項へ送ることとした。

写真は、本書全体に関わりの深いものと、ソリストの教職員については巻頭に載せ、個々の演奏会に関するものは本文中の該当箇所に配した。

また演奏会では外国の作曲家による原曲が、しばしば独創的な日本語の歌詞付けで歌われている。このような歌詞にふれることは、当時の洋楽受容の実状を知る一つの手がかりとなるため、頻繁に登場する唱歌のうち、原曲の特定できるものを選び、補遺の「唱歌歌詞選」としてまとめた。

今回の『演奏会篇第一巻』作成にあたっては日本近代音楽館から多大なご協力をいただいた。館長の遠山一行氏他館員の方々に深く感謝申し上げます。

出版を引き受け、編集部の度重なる面倒な注文にも快く応じて下さった音楽之友社社長淺香淳氏、制作部長中山正吾氏、製作を担当して下さった全集編集室課長林靖章氏、出版局制作部清野陽子氏に厚く御礼申し上げます。

また、百周年記念事業の際に本学学部長として陣頭指揮をとられ、百年史編集委員でもおられた服部幸三先生からは、今回の編集・出版に関しても引続き貴重なご教示をいただいた。ここに心からの感謝を記したい。

最後に、実務に携わった音楽学部卒業生の川西真理、中村仁美、中村美郁、福岡まどか、高原聰子、久万田直子の各氏の名前をあげてそのお骨折りに感謝する。

平成二年七月

大石清
船山隆
山本文茂
佐野靖
森節
橋本久美子